

白紙余談

オンライン上の文章表現にみる若者たちの特徴的な癖とは!?

◇つい先日、新型コロナ騒動に付随して、新卒社員へのオンライン研修の担当役を会社から申し付けられた知り合いA氏の話（嘆き）を聞き、「なるほどなあ」と思わず深く頷かされた。それは昨今の20代前半の若者たちの「文章力」についてだった。

◇研修そのものはテレビ会議システムなどを使い、なかなか快適にできているらしい。問題は新卒社員とのメールでのやりとりで散見される「文章」だ。端的に言えば、ツイッター上の「つぶやき」のような調子の文章、つまり、極端にミニマルな調子（説明の要素や感情表現の要素の極端に少ない）文章が送られてくるケースが多い。そのため意図が伝わりにくく、詳細については何度もやりとりせざるをえないというのだ。

◇必要十分な情報を簡潔に、分かりやすく書く文章技術は、我々のように媒体で仕事をしている者だけでなく、営業畑・技術畑の社員にも不可欠な要素だろう。ところが現代の20代前半の若者たちの多くは、SNSなどでウェブ文体に通じている半面、文章のもつ約束事を無視したような形式が常識化しつつあるという。

◇とくにツイッターはご承知のように、基本的には1400字の字数制限がある。英語圏などでは倍の2800字に拡大しているらしいが、いずれにせよ、原稿用紙でいえば半分以下、あるいは3分の1程度で表現しなければならぬ「縛り」がある。本来こうしたミニマルな文章表現は、そのなかで「意を尽くそう」とすれば、非常に難しく、また奥が深い。1400字、2800字というような世界は、俳句や和歌とも違う、散文の世界

では極小のスタイルである。これできちんと、意を尽くしつつ書けたら「凄いこと」なのだ。

◇ツイッターで投稿する人のなかには、何本も立て続けに登校する例も多くみられる。これは1400字や2800字では表現しきれないことをツイートしようとする人たちに共通するやり方だ。そういう人たちはとりあえず「きちんと説明したい」という意識があるものと思われる。つまり、従来の普通の文章表現の方法を基盤とする人たちともいえるかもしれない。

◇逆に1400字という短文1本で事を済ませようとするれば、改行も何もないような形式のキャッチフレーズ的な表現、週刊誌の見出しのような「過激な表現」を使っただろうが耳目を集めやすく、フォローも付きやすい。実はそうしたやり方の癖がついている若者が多いという現実が、冒頭のA氏の嘆きに繋がる。

◇週刊誌などの場合、見出しを過激にしても、本文で詳しい説明を行えば、見出しの過激さは和らぎ、納得を得ることもできる。ところが1400字で済ましてしまふ癖がつくと、長めの文章も紋切り型でしか書けなくなりがちだ。それでも必要十分な要素が入ってれば社内の報告書としては通用する。しかし、企画書などの対外的な文章となると、とても使えない。

◇A氏の嘆きと、是正への努力は今も続いているが、その成果は「はかばかしくない」という。実は同様の傾向は、媒体での仕事を希望する若者たちにもみられる。我々としてもA氏の嘆きを「対岸のもの」と、うかうか聞き捨てにしているわけにはいかない。(E)